

HPV ワクチンを接種してからの10年

酒井七海

2011年、16歳の時に子宮頸がんワクチンを接種しました。今はHPV ワクチンに名称が変わっていますが、私が接種した当時は子宮頸がんワクチンと呼ばれていたのです。あえて子宮頸がんワクチンと呼びます。

今日は、子宮頸がんワクチンを接種するまでの私について、接種してから起きた症状や置かれた状況、訴訟の原告となるに至った思い、現在の学生生活、そして、今後の訴訟に望むことについてお話しします。

私は、子どもの頃から健康で、予防接種に行く以外、ほとんど病院にかかることはありませんでした。学業だけでなく、ピアノにも打ち込み、県のピアノコンクールで金賞を受賞したこともあります。高校では琴部の部長を務め、オーストラリア語学研修など課外活動にも参加し、思う存分楽しんでいました。将来は、人を助ける仕事に携わりたいと弁護士を目指して、法学部への進学を希望していました。しかし、16歳の時に私の人生は一変しました

高校1年の終わりの2011年2月と3月に、サーバリックスを2回打ちました。当時は、接種を勧める情報が身の回りにたくさんありました。電車の車内の広告、市内の掲示板、自分あてに送られてきた市からの通知。通っていた女子高では、案内が黒板に貼られました。どれにも、子宮頸がんは唯一ワクチンで防げる癌であること、近年若い女性に増えている恐ろしい病気であること、国が勧めていて、高校1年のうちに1回目を接種すれば、無料で受けられることが書かれていました。志望校に合格し、自分のこれからの期待を抱いていた時期です。弁護士になるという夢を叶えて働きたい、そしていずれは結婚して子供を産みたい。そんな将来を思い描いていたから、癌をワクチンで防げるならと思い、接種を決めました。

接種したクリニックでは、初めに問診票と一緒に説明が書いてある紙を渡されました。そこには、今まで受けてきた予防接種の説明と特に変わらないことが

書かれていました。接種前の診察では、「筋肉注射だから他の注射よりも痛いと思う。失神することがたまにあるので、接種後30分は院内の椅子で安静にするように」と医師から言われました。

一回目を打った後、しばらく腕の筋肉痛が続きましたが、注射自体の痛みは、他の予防接種とあまり変わりませんでした。ただ、それまで順調だった生理がなくなりました。念のため医師に相談しましたが、「ワクチンとは関係ない」と言われました。

しかし、2回目を打った翌日の夜、お風呂から出ると、突然、気を失って倒れ、40度近い高熱が出ました。医師と相談して3回目の接種はやめました。その後、それまでなかった症状が次々と現れました。

高校2年の5月に、階段を上っている途中、突然意識を失って階段から転落し、救急搬送されました。右手首は骨折、骨が裂けていると言われました。それ以来、階段で、授業中椅子に座った状態で、立っているとき…いろいろな状況で何度も失神を繰り返しました。他にも、右手・右足が、正座した後のように痺れ、ピアノを弾くとき、指がもつれることがありました。そのほか、耳鳴り、急に耳が聞こえなくなる、暑くないのに汗をかく、ふらつき、酷い頭痛など、いろいろな身体の異変が出てきました。

高1の頃から、新書を読んでレポートを書くという課題が定期的に出されてきました。私は、もともと論旨をつかんで要約することが得意でした。ところが、高校2年になってから、新書を読んでも内容が理解しづらく、文章を論理的に書けなくなりました。先生からは、以前は得意だったのに、今回のレポートは今一つ分からない、脈絡がない、誤字脱字も多いと指摘されました。その後も、めまい、ふらつき、耳鳴り、頭痛などが続き、右手の痺れや脱力、倦怠感、気づくと寝てしまっている、校内で教室がわからなくなる、部室の取り間違いなどの異変が起きました。高校3年の秋からは、それまでの症状が強くなったのに加え、強い痺れや脱力感がずっと続くようになりました。

クリニックから大学病院までいくつもまわりましたが、原因がわからず、体調不良で学校を休む日々が続き、冬休み、私は長時間の意識消失発作を起こし、大

学病院に救急搬送され入院しました。頻脈がひどく、脈が突然190まで跳ね上がるのが一日に何度もありました。自分の体はどうなってしまうのだろうかという不安な気持ちを抑えるために、入院中も体調が悪い中でも起きていられる日には、受験勉強をしました。主治医や両親からは現役での受験をあきらめようと言われましたが、受けられる科目だけでも受けたいという思いで、母に頼んでセンター試験の会場まで連れて行ってもらい、頑張って7科目は受けました。でも、志望校の受験には9科目必要なため、願書は出せませんでした。悔しかったけれど、そのときは、しっかり治して一年間頑張ろうと、今は苦しくても1年後には楽しい大学生活を送っている自分を想像しました。でも、現実は違いました。

卒業後も、症状は悪化する一方でした。外出中、予備校の休み時間、通学中の電車の中、帰宅途中の駅の階段など、突然起きる失神の発作に悩まされました。頻脈、不整脈も続きました。世界史の暗記が苦手になる記憶障害、数学の図形問題の平行線が平行に見えない空間認知の低下などの新たな学習障害も出始めました。浪人1年目、予備校に通えたのは4月だけでした。

5月ごろから、手足の痙攣が始まり、杖なしでは歩けなくなりました。意識を失った後は全身が脱力して起きあがれず、硬直の症状があるときは、耐えがたい程の激痛です。何度も救急車で運ばれましたが、運ばれた病院では、ヒステリー発作だから放っておいていいと言われて、長時間放置されたこともありました。

治療を受けることができず、記憶障害、学習障害、運動障害が一気に悪化しました。漢字がわからなくなったり、文章の理解に時間がかかるようになり、勉強が進まなくなりました。全身の脱力のため、立てなくなり、椅子に座っていても身体を支えられず横に倒れてしまいます。お風呂もトイレも一人ではできず、母に介助してもらわなければなりません。移動には車いすが必要になりました。それでも、浪人1年目の1月、センター試験を受験しました。しかし、車いすに座り続けることも難しく、この時はもはや気力との闘いでした。当然、よい結果は出せず、2浪することになりました。

浪人2年目、治療してくれる病院を探し、高速で片道5時間もかかる病院に行

きました。そこで初めて詳しい検査をして、高次脳機能障害と診断されました。1年間ステロイドパルス療法を受け、記憶障害の一部が改善しました。進路変更を余儀なくされましたが、2年の浪人の末、大学へ進学できたことは大きな喜びでした。しかし、そのほかの高次脳機能障害の症状や、運動障害、両目とも視野の右上1/4が見えない視野欠損などには効果がありませんでした。

大学入学後も、症状は進行しました。1年生の時は、利き手交換した左手で字を書いていたのですが、今は両手とも指がほとんど思い通りに動きません。杖で少し歩けていたのですが、自分でトイレに行くこともできなくなりました。大学3年の5月に、突然全身が脱力してからは、一人で寝がえりを打つことも、起き上がることもできなくなり、それ以来、家の中でも車いすを使っています。朝起きてから夜寝るまで、生活のすべてに介助が必要となりました。私にとって大学生活は、変わっていく自分の身体と向き合う時間でした。

私の学生生活は、たくさんの支援によって成り立っています。朝、ベッドから自力で起き上がれないため、家族に起こしてもらい、車椅子に座らせてもらいます。朝食は食べやすいようにセッティングしてもらい、家を出る前にトイレと着替えを介助してもらいます。通学は、母か福祉サービスの車での送迎です。大学内では、障害学生支援室を利用しており、学生サポーターが教室間の移動のサポートや、机のセッティングをして、ノート代筆のために授業中も同席します。休み時間には、自分でチラシを配って募集した学生のボランティアにトイレの介助してもらいます。それでも、帰宅すると疲れから仮眠が必要です。友達と交流したりどこかへ出かけたりという学生らしい時間を過ごすことはできません。

大学入学後からは、新たな治療を受けるために鹿児島大学病院に通うようになりました。血液浄化療法という、人口透析の機械を使って、血液中の過剰な抗体をろ過する治療です。治療のたびに太い注射針を刺したり、首にカテーテルという治療用のチューブを入れたりします。体調の波が激しく入院が多いため、4年では卒業できず、5年間大学生活を過ごしました。5年間は1827日です。その間に650日を病院で過ごしました。

大学5年目は特に体調が悪く、半年入院しました。常に目が不随意にグルグルと動き続け、意識のある時間が1日で3、4時間だけ、顎と舌の不随意運動のために自分で舌を嚙んでしまったり、自分が学生であることを忘れてしまうくらい辛い日が続きました。それでも、理解ある大学と病院のおかげで、なんとか卒業することができました。眼振で文字が読めないため、パソコンの読み上げ機能を使い、入院中で資料がないため、友人にスキャンして送ってもらい、手が不自由な人のためのパソコン機能を使い、入院中のベッドの上で卒論を仕上げました。卒業が決まった時は、達成感に包まれました。

けれども、その先が私には見えません。大学院に進学しましたが、卒業後の自分が思い描けないのです。コロナの影響には、悪いことばかりではなく、私にとっては良い変化もありました。それが「オンライン」の選択肢です。働くことを考えても、在宅勤務が以前よりも一般的になりました。通勤の必要がなくなり、休憩時間にベッドで横になることもできるので、身体の負担がかなり軽減します。それでも、やはり今の私にとって、働くことは大きな課題です。例えば、朝なかなか起きられない、なんとか起きても、常に強い眠気があって、眠気のせいか記憶力の問題か、自分がメールを送ったことすら覚えていないこともあります。体調が予測できず、予定が立てづらい、こなせる仕事が日によって違う、そんな不安定な状況を抱えて就職するには、超えなければいけないハードルがたくさんあります。何よりも、接種から10年経った今も、根本的な治療法がないのです。

これまで、数えきれないほどの症状が私の身体には起こりました。しかし、協力医療機関に指定されている都内の大学病院では、医師から子宮頸がんワクチンを受けたことを忘れて、車いす生活を受け入れなさい、と言われました。母を責めて「母親が騒ぐのが良くない」と言ったり、「診察室から出て行け」と言う医師もいました。適切な治療を受けられる病院にたどり着くまでに3年かかりました。発症直後に適切な治療を受けられていたらと思うと、悔しくてたまりません。

被害の救済を求めて声を挙げることは、とても勇気がいりました。それでも、

被害を訴え、裁判することを決意しました。一番の理由は、私の症状はどんどん悪化しているのに、国、製薬企業へ出された、私の被害報告が「回復」とされ、何度訂正をお願いしても訂正されなかったこと、2015年に国が行った追跡調査でも、重篤とされた186人に私はカウントされていないことです。私の症状を見れば、回復扱いにしてワクチン被害者一覧から外すことなどあり得ないはずですが、私たちの被害は、データではなく一人ひとりの人間に実際に起きていることです。国と製薬企業には、私たちの被害に、正面から向き合って欲しいという思いで、原告となることを決めました。

今、私たちの前には、大きく2つの壁があると思います。1つは、治療法がまだになく、既存の疾患や障害の概念に当てはまらないために、制度の谷間にいるという、医療や福祉の問題です。特に今は、コロナの影響で県外の病院への受診が難しくなり、治療ができていない被害者が少なくありません。

そしてもう1つは、無理解から生じる問題です。「副反応なんてデマだ」と否定されたり、「反ワクチン派のせいで、将来のがん患者が増える」など、バッシングを受けることもあります。私は、ワクチンそのものを否定したいのではありません。ただ、助けて欲しいだけです。予防接種には、副反応が必ずあると分かっているながら、起きた副反応を社会が受け入れず、治療や支援が整備されていないことに、この10年苦しんできました。副反応について、適切な情報提供ができるまでの間は、積極的な接種勧奨を一時的に差し控えるべきとの厚労省の見解が示されてからも、国や製薬企業は、私たちと向き合う事がないままです。私たちは今も、被害に苦しみ、治療法を切望し、生きていくための支援を求めています。

また、私たちは、子宮頸がんを予防する事を阻止しているのではありません。安全で安心な方法で、より若い世代の将来の健康が守られることを願うからこそ、活動をしています。国や製薬企業には、よりよい予防接種行政を共に築くためにも、私たちの現実を受け止め、問題の解決策を共に考えてほしいと願っています。この訴訟を通じて、全国各地にいる被害者が、地元で治療を受けられ、自分の人生を歩んでいくために必要な支援を受けられる体制が作られることを望

んでいます。

そして同時に、絶え間なく続き、繰り返される薬害の歴史を終わらせたいと強く思います。予防接種は誰もが経験するものです。ワクチンは、最も身近な薬剤だと言えるでしょう。薬害は、自分とは離れた遠い世界で起きている問題ではなく、自分の生活と隣り合わせにあります。そのことに気づき、薬害を許さないという姿勢を持ってください。被害者が、健康と生活の回復を願って、治療法の開発や支援体制を求めるだけでは、薬害が生み出される社会の根本は変わりません。次の薬害を作り出さないために、薬害を繰り返す社会を変えるために、私たちのことを正しく知り、一緒に闘ってください。